
番外：ゆうかりん、疾走す～みこもまほうしょうじょも、おねーさんも～

紅山車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外：ゆうかりん、疾走すゝみこまほつしょうじょも、おねーさんもゝ

【Nコード】

N0254N

【作者名】

紅山車

【あらすじ】

「……増え、て、る……？」その事實は、幽香を疾走へと誘った。嫉み狂しみ膨らみまた嫉みを乗り越えて、その先に得たものは一体何だったのか！？エンディングまで、泣くんじゃない。東方起承転百万アクセス突破記念短編。

（前書き）

皆様こんにちは、紅山車です。

おかげさまで、東宝起承転は百万アクセスを突破いたしました！
何かにつけて祝いたいこの体質、今回も短編という形で祝いたいと思います。人間その気になりゃ、毎日毎日一日一日が祝日さ！二トじゃないよ！

時系列としては、人里に買い出しに行く、少し前辺りになります。
こういうスピンオフ的なのを、一度やってみたかったです。内容はともかくとして。

それではごゆるりと。今回もどうか、真面目に読まないで下さい。

これは夢だ。

花に止まる胡蝶が、私を見ていて——目の前の風景は、その視点から見ている夢なのだ。

私は蝶。ふわふわと軽い羽を羽ばたかせて、絶望の表情を浮かべている風見幽香の顔を、哀れそうに見ているのだ。

そうしてつぶやく。

ああ、私は何故、あんなところでうなだれているのだろう、と。

——解っているのだ。

『あれ』は私で、蝶なんかこの場には存在しないなんてこと。

つまり——。

「……増え、て、る……？」

体重計が示す数値も、紛れも無い現実だということ。

「孝」

朝っぱらのこと。

朝食を準備していた俺に、幽香はこんなことを言った。

「今朝の朝食は要らないわ」

「……え、何で？」

要らないと言われても、既に食卓には俺と幽香、椀と三人分の朝食が並んでいる。これが一人分減るとなると、片付かない。

「……何でも良いじゃない。今日はちよつとそういう気分だけ。

余計な詮索は無用よ」

「む」

その高圧的な言動に——彼女にとっては平常な物言いなのだが——

フィードバック

俺は軽く眉を潜める。何の理由も無しに、あの大食花幽香が朝食を抜くはずがない。

「そうはいかないな。折角作ったんだから、せめて理由を聞かないと納得できない」

「……五月蠅いわね。頭蓋骨ぶち抜かれたいの？」

ごつりと、見た目に反して重量感のある兵器傘が、俺の額に押し当てられる。これ以上意地を張っていても、本当に撃ち込みかねない

——何せ相手は風見幽香だ。

だけど。

「……こればかりは退けない。料理人として、折角作った料理を食べてもらえないのは、何よりの恥だ」

「それを言うなら、私の事情を聞かれるのも何よりの恥なのよ。一人の女性としての、ね」

女性としての、という単語に、俺の頭にある現象が浮かび上がり、思わず口に出す。

「……生理か？」

「小男子焼き殺す」

「落ち着けそんな魚は居ないから通報されるぞごめんなさいお願いしますす許して」

我ながら最低の一言だった。が、命を張った謝罪が功を奏したのか、

幽香は呆れたように一つ溜息をついてから、ぽつぽつと、事情を打ち明けはじめた。

「……体重……」

事情を聞き、改めて自分の無神経さに自己嫌悪に陥る。そりゃあ、女性に体重の話題はNGだ。

「まあそういうことだから、今朝は遠慮しておくわ。昼と晩はちゃんと食べるから」

落ち込む俺に見向きもせず、幽香はすたすたと勝手口の方へと歩を進める。

「どこか行くのか？」

「いいえ。ただちよつと、そこら辺を走り込んでくるわ」

そう言う幽香の姿は、真っ赤なジャージにランニングシューズと、フル装備だった。というか、いつ着替えたんだ。

「朝飯食ってないのに、走ったりなんかしたら倒れるぞ」

「馬鹿ね。胃に何も入っていない状態だからこそ走るんじゃない。吐いたりしたらどうするの」

どれだけ走り込むつもりなんだ、こいつは。胃液垂れ流しながらでも走るつもりか？

「……だったらせめて、水くらいは持って行っとけ。まだ八月だし、外は暑いだろ」

俺はそう言つて、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、首から下げられるストラップを取り付けてから幽香に投げて渡す。

「ありがとう。それじゃ、行ってくるわ。あ、昼は適当なフルーツを盛り合わせておいて」

それを受け取った幽香は、挨拶もそこそこに、とつと走って言うてしまった。一人残された俺は、ただ一言だけ呟く。

「……心配だなあ」

「あら、珍しい」

そう声を掛けられたのは、太陽の焔を出て森に差し掛かった直後のことであつた。

「何か用事かしら?……紫」

何も無い空間に、そう呼びかける——突如空間が裂け、予想通りの人物が、文字通り顔を出す。

「いえ、特に何も。ただ、貴方が運動しているのを見るのは、初めてだったものだから」

八雲紫は、くすくすと耳障りな声で笑いながら、腹立たしいまでに楽しそうな表情で、汗を流す私を見下ろしていた。

「興味本位での観察なら、やめてくれないかしら。見ての通り、私は忙しいの」

「『脂肪を燃やすのに?』」

何故知っている、とは言わない。彼女に隠し事など、あつてないようなものだ。

改めて彼女を見る。ドレスに覆われているその身体は、服の上からでも解るほどにスレンダーだ——正に『出るところが出ている』体型だと言えるだろう。

だからこそ、私は聞く。

「……貴方は、何か体型を維持するためにしていることは、あるのかしら?」

「ええ、それはもう。週に一回ほど、脂肪を構成する原子の結合を『境界を操る程度の能力』で」

「聞いた私が馬鹿だったわ」

途中で話を聞くのを放棄し、走り込みを再開する。後ろでは「頑張

れ」とか戯言が響いている。
本当に時間の無駄だった。

「……いきなり何だぜ？」

道中で、休憩にと立ち寄った――霧雨魔理沙が運営する魔法雑貨屋で、彼女は私の「身体を軽くするアイテムはないか」という、駄目で元々な問い（太ったとは、口が裂けても言いたくなかった）に、こう答えた。

「また、あるっちゃあるが」

「あるのっ!？」

予想しない言葉に、思わずカウンターを強く叩く。魔理沙は「机、壊すなよ」と、おどおどしながら言い残して、店の奥へと消えて行った。なんかがつちゃんがつちゃん聞こえてくる。

「やー、あったあった」

ホコリだらけになって戻ってきた彼女の手には、一本の小瓶が握られていた。それを机に置きながら、紹介を始めて行く。

「まずは、これだな」

そう言つて、ことり、と私の前に差し出されたのは、中に白い粉末状の薬のようなものが入った瓶。

「何、これ？」

「ふしぎなくすりだぜ!」

……彼女のこの、無根拠な自信はどこから来るのか。

「どうやって使うの？」

「鼻から吸う」

これまたえらく変わった摂取法だ……いや、マジックアイテムでは案外普通なのかもしれない。

「……どうなるの？」

「頭がふわふわして空も飛べそうになるぜ!」

……ああ、もう駄目だ。必死になって考えないようにして居たけれど、もう底いきれないくらい非合法の匂いがする。

「もう飛べるんだけど、私」

「……盲点だったぜッ！」

「みらくるみらくる、るるるるる」

てへっ　と笑う魔理沙に、私は笑顔で彼女の頭を掴む。みしみし、と、爽やかな朝にはおおそ似つかわしくない音が響く。

「痛い痛いごめんごめんちゃんとしたの紹介するから」

「……ちっ」

舌打ちしてから手を離す。魔理沙はしばらく頭を押さえてうずくまっていたが、すぐに立ち上がり、慌てて次の商品を選びはじめる。

「えーっと……じゃあ、これなんかはどうだ？」

そう言っただけで出したのは、何の変哲も無いように見える、膨らんだ風船。よく見ると、真ん中には大きく『P』と書かれている。

「何と！これを食べれば、身体はふわふわ軽くなり、空中遊泳も楽しめる！あの赤い帽子の配管工も使ったという逸品だぜ！」

「……うーん」

首を傾げる。空を飛ぶアイテムが欲しいんじゃないのだけれど、この際文句は言っていられない。身体が軽くなると言うのなら、少しは目をつぶるんじゃないか。

そう思い、私は魔理沙に言う。

「使ってみても良いかしら？」

「ああ。ただそれ消耗品だから、お金貰わないと」

「使ってみても良いかしら？」

「……いやだから、使っと体内で溶けちゃうから。お金を、な」

「使ってみても良いかしら？」

「…………おか」

「良いかしら？」

「はい」

酷いものを見た。（爆発事件現場に、大怪我をしている状態で見つかった、大破した霧雨魔法店の店主・霧雨魔理沙の談）

「身体を軽くする方法？」

私の姿を見てゲラゲラ笑う魔法使いを完膚無きまでに駆逐した後、走り込みを続けた私は、いつしか博麗神社にまで来ていた。空を飛ばないでの階段登りが、ここまできついとは知らなかった。確実に良い運動にはなっただろうが、もう二度とやりたくは無いと思う。登り切り、疲弊した私を待っていた博麗霊夢は、驚いた様子で私に理由を聞いてきたため、魔理沙にしたものと同じ質問をしたのだ。それを聞いて、霊夢は答えた。

「……幽霊の仕業かも」

「……………」

また話が飛躍した気がする。

「身体が重くなった、と感じたのがもし最近の出来事なら、まだ除霊の余地はあるわね……すぐに支度するわ。待ってて」

「あ、ちょ……待」

言い切る前に、霊夢は襖の奥へと入っていつてしまふ。まあ、呼び止めた所で何と言ったらいいか解らなかったし、別に良いか。実は太った、等と口走れば、何と言われてからかわれるか、わかったものではない。

しばらくして、姿を現した霊夢の手には、よく神主なんかが持っているお祓いの為の棒が握られている。少なくとも、アルコール類は握られていない。

「始めるわ。その椅子に座って目を閉じて」

何かもうどうでも良くなった私は、言う通りに椅子に座り、ゆっく

りと目を閉じる。まあ、私に憑くほど度胸のある霊なんて居るはずが無いだろう。気楽に構えて座っていれば、良い休憩に……。

「見つけたわ、幽霊！」

「ええっ!？」

居たの!？」

居ちやっただの幽霊!？」

え、何その命知らずな霊？

……まあもう死んでるんだから、命なんて知らないか。いやそれにしても、本当に？

目を閉じているから、その顔を拝めないのが残念だ。

「こ、これは……な、なんて……巨大な霊なのかしら……!」

え、そこまで？そんなの私飼ってたの?というか、貴方が動揺するほどの霊ってやばくない？

「……これは、質量が……」

質量!？え、実体あるの!？何、じゃあ、あの体重計の数値は幽霊込みのものだった、てこと?ひゃっほう、体重減ってないのは嬉しいけど今までのは無駄な努力!

「……なんで……なんで幽香にはこんなで私には……」

「……?」

何だろう。霊夢の様子がおかしい——まさか、幽霊に乗り移られてしまったんじゃないか？

「うっ……うっ……こんなの、不公平よ……恨むわ、私の一生をかけても恨むわ……」

「!？」

啜り泣く声まで聞こえてきた!？しかも恨むって……これは、本格的にヤバイのでは？

——目を開けるのが怖い。だが、目の前で霊夢が、私のせいで苦しんでいる。

私は一つ、深呼吸をする。

大丈夫。

大丈夫だ。

幽霊一匹撃退できずに。

何がフラワーマスターだ。

私が——風見幽香だ！

「……………っ！」

ゆっくりと見開いた眼——その眼に映った光景は。

「なんで……………なんで……………幽香の胸は大きくて……………つく、ひつく……………わ、私のは小さいのよお……………何よ……………この圧倒的質量ッ！……………恨む、恨むわ神様……………もうこの際守矢の神様でも良い、神主様でも良い……………いつそのこと、今じゃなくて来世でもいいからあ……………私の胸を大きくしてえ……………」

私の胸の前で、お祓い棒をしゃんしゃん揺らしている、貧乏相貧乳巫女の姿であった。

「…………今帰ったわ…………」

水をごくごく飲みながら、疲労困憊、といった感じで小屋に入る。博麗神社からは飛んできたので、疲労は行きほど溜まっていなかったが、その分木陰などの日陰が無くなって直射日光を受ける形になってしまい、結果汗だくになって帰ってくるようになってしまった。孝一が持たせてくれた水が無ければ、本当に気を失っていたかもしれない。

さて、当の彼は、というと。

「おう、お帰り……………って、汗だくだな。ほれ、タオル」

…………何も言わず、汗だくの私を見て、ただふわふわのタオルを手渡してきただけだった。

「…………何も言わないのね」

行く前は、何かにつけて注文を付けてきたのに。

「まあ……………本人がやる、って言ってるんだから、第三者が口出すのは野暮な事だろ」

「……………」

顔をタオルで拭いながら、私は彼の澄ました顔を見る。何故か彼はやけにそわそわしていた。

私が勝手口の扉を開けた時、孝一は直ぐ前にいた。

既にタオルを手に持った状態で。

「…………ふふっ」

小さく、気づかれないように、タオルを顔に押し付けて、私は小さく笑った後――呟いた。

「心配してくれてありがとう」

「?……今、何か言ったか?」

「いいえ、何も。ああ、それと私、もうダイエットは止めるわ」
彼の問いに惚けるように答える。

「……そりゃまた、なんで」
驚いた様子で、彼は言う。確かに、ここで止めることは、彼の心配を無下にするようなものだ。

けれど私は。

孝一の問いに、こう返した。

「孝一の料理が食べられないのはダイエット以上に苦痛なもの」

実はというと、俺の方も少しだけ責任を感じていた。

中華料理は総じてカロリーが高い——だからこそ美味しい、という
ものもあるのだが。俺は、その辺の事情を語ることなく、また幽香が
食べすぎるのを止めることもしなかった。

だから、とは言わないが。

ご注文のフルーツとは別に作っておいた、昼食。

暑い夏にピッタリで、それでいてヘルシーな食べ物。

ダシに浸けた卵麺の上に、錦糸卵と蟹蒲鉾に、胡瓜やトマト等の野

菜を載せた、冷し中華。炭水化物である麺は少なめに、野菜を多めにする事で、よりカロリーが少なくなるようにした。またお好みでキムチを添えることで、脂肪の燃焼を助ける効果も増す。苦心の末に思い付いた、幽香専用のメニューだった。

「これだったら、急に太ることはないと思う……んだ、が」

はた、と気付く。

「……へえ、そう」

何故だか、幽香の口調が冷たくなっていることに。

「こんなものが用意されてある、ということは」

まさか、冷し中華が嫌いだった、ということだろうか？ いや、幽香は何でも食べられる筈――。

「私が挫折して帰ってくるのを、見越していた訳ね？」

あー。

そゆこと。

「うん。思ってた」

「結局、いつも正直なのが正解とは限らない訳よ」

理不尽の一言に尽きる。（大破した小屋の中で、大怪我をして倒れ

ていた住人・前多孝一の談)

後日談。

何とか幽香の体重も元に戻ったようで、一安心。気分良く鼻唄を歌いながら皿洗いをしていたところ――椀が、何やらもじもじしながら俺に近寄ってきた。

「あ、あの……孝一さん」

「ん、何だ？」

「もう冷蔵庫の中身、空なんですけど……」

「……………」

そういえば冷し中華作るのに色々実験したなあとかその時に材料一杯使ってその後買い出しにも行かなかったなあとかそんなことを思っているうちに右肩が異様に重く感じたので俺は振り向いた。

「カ・イ・ダ・シ・か・く・て・い・ね」

腹を空かせた鬼がそこには居た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0254n/>

番外：ゆうかりん、疾走す～みこもまほうしょうじょも、おねーさんも～

2010年12月11日14時18分発行